

新自由主義を定義する

— 『思考集団 (Thought Collective)』 アプローチを巡って—

稲井 誠*

INAI, Makoto

キーワード 新自由主義, 思考集団, 知識人, モンペ
ルラン協会

はじめに

第一章 起点としてのモンペルラン協会

(1) ハイエクの「知識人」論

(2) モンペルラン協会の設立とその位置づけ

第二章 「思考集団」アプローチを巡って

(1) 「思考集団」について

(2) 「新自由主義思考集団」

第三章 P.ミロウスキーの「新自由主義」論を巡って

(1) P.ミロウスキーの「新自由主義」論

(2) 批判的検討

はじめに

わが国において、「新しい資本主義」が唱えられ、「新自由主義からの脱却」が政治的スローガンとして唱えられることがごく最近あったが、その後議論が深まることもなく、スローガンとしても霧散してしまっただけのように思われる。一方欧米に目を向けると、新自由主義の歴史を主題としたアカデミックな著作が一定数の読者を獲得し、新自由主義を巡る議論がアカデミックな枠組みを超えて、一般紙誌や政治ブログに至るまで、広く論じられている状況に気がつく。このような状況の中で、議論のテーマとして目をひくのは、「新自由主義の終焉」にかかわるもので、その中でも、とりわけ2008年の金融危機とコロナ禍を経験する中で、新自由主義は終焉を迎えたとする立場からの

議論である。例えば、ある論者は、次のような現代に対する認識を示す。

この40年間、われわれは新自由主義の時代を生きてきた。この時代とは、規制緩和、自由化、民営化、緊縮財政によって公共政策が定義される時代である。(中略)しかし、この10年間、新自由主義的なコンセンサスは崩壊した。今やその結果は破滅的なものであったということが見て取れる。(中略)現代の中心的な問題は、新自由主義の後に何が到来するかである。新たな政治のパラダイムは、先立つ時代の挑戦と失敗に対する応答として登場する¹⁾。

ここでは、みずからが生み出した諸矛盾、とりわけ経済的不平等の拡大や人々の結びつきの破壊により、新自由主義はコンセンサスを失い、終焉を迎えたことが議論の前提とされ、それに続くものを考察することが緊急の課題であると設定される。

そして同様の立場は、新自由主義を一つの政治秩序として把握し、アメリカ現代史の中に位置付け、その勃興と終焉を描いた、歴史学者のゲアリー・ガーストル (Gary Gerstle) の『新自由主義秩序の興亡—自由市場時代のアメリカと世界』にも見て取ることができる。彼によれば、新自由主義の世界観は、経済的な規制緩和と個人の自

* 龍谷大学 非常勤講師

1) Sitarman (2019)

由、開かれた国境とコスモポリタニズム、グローバルゼーションと万人の繁栄の増大の約束を調和させることによって、解放を約束するものである。しかし数百万が失業し、経済の不平等がさらに拡大し、労働者ではなく投資家を救済することで、労働者は新自由主義と民主主義に対して信頼を失い新自由主義は、2008-9年の経済の崩壊を超えて生き延びることはできなかつたとする。そして政治秩序の衰退期においては、以前はラディカルで、異端で、実現性のないと見なされた政治思想やプログラムが、周辺から主流派の位置に移動するとして、次のように述べられる。

1970年代には、ニューディール秩序の崩壊によって、長い間軽蔑されてきた新自由主義的な経済再編のアイデアが定着した。そして2010年代には、新自由主義秩序の崩壊によって、ランプ式の権威主義とサンダース式の社会主義が勢いをもつ空間が開かれた²⁾。

このように、イデオロギー的なヘゲモニーを失うことで、新自由主義的な要素は残存する可能性はあるが、新自由主義秩序³⁾は終焉を迎えたことが強調される。

他方でこのような立場と一線を画して、新自由主義の存続を強調して、「終焉」論を批判する論者も存在する。そのような立場を代表する論者として、思想史研究者のフィリップ・ミロウスキー (Philip Mirowski) を挙げることができるであろう。彼は、金融危機を経た後のコロナ禍において

も、アメリカでは公衆衛生や宇宙開発といった科学分野では新自由主義政策が依然として継続されているという状況を引き合いに出し、新自由主義が終焉を迎え、その遂行主体が衰退しているという見解に対して次のように述べる。

このような見方が見落としているのは、強力な周囲を取り巻くインフラ (シンクタンク、メディア、活動家組織、偽の草の根運動のコンサルタント、業界団体、大学機関) である。(中略) 思考集団 (thought collective) の具体的な発現は、様々な国で確固なものとして定着し、パンデミックの期間においてさえ、次から次へと勝利を重ねている⁴⁾。

ここで「思考集団」として述べられているものは、P.ミロウスキーが新自由主義を論じる際の中心となる概念である。彼は、様々な新自由主義の定義の中で、「思考集団」に基づく定義を「最も簡潔で、最も豊富な実証的な内容を有する」と述べる。この「思考集団」を中心にした新自由主義研究は、これまでに成果を上げ、欧米の新自由主義研究の一潮流を形成している⁵⁾。本稿は、それらの成果を参照し、新自由主義研究における「思考集団」アプローチの中心的論点を明らかにして、その問題点を考察することを主題とする。その際、この潮流の中心的な概念となる「知識人」「思考集団」に関して、ハイエクの知識人論、フレックの科学論を検討の材料とすることで、この潮流のアプローチをより明確にすることがはから

2) Steinmetz-Jenkins (2022)

3) 「政治秩序」は彼の独自の概念で、選挙のサイクルを超えて持続する、イデオロギー、政策、選挙民の布置を意味し、新自由主義秩序は、1970-80年代台に形成され、1990-2000年代にピークをむかえ、2010年代に衰退したとされる。Gerstle (2022) Introductionを参照。

4) Mirowski (2022)

5) この立場からの代表的な著作としては、Mirowski, P and Plehwe, D (2009), Mirowski, P, Plehwe, D and Slobodian, Q eds (2020)。

れる。

第一章 起点としてのモンペルラン協会

(1) ハイエクの「知識人」論

新自由主義を、特に思想史的な観点から考察した場合その歴史的な起点をモンペルラン協会の設立に求めることが多くみられるが、本稿が対象とする「思考集団」アプローチも同様である。しかしモンペルラン協会を検討する前に、その設立に指導的な役割を果たしたフリードリヒ・フォン・ハイエクの知識人論を検討する。そのことで、新自由主義を知識人による思想運動とするこのアプローチの立場を理解する上で、重要な観点を手にすることができると考えられる。彼の知識人論は、1949年に『シカゴ大学ロー・レビュー』で発表された「知識人と社会主義」において表明される。アメリカにおいて知識人の現代社会における役割が過小評価されていることに対する警鐘から書き起こされるこの小論において、ハイエクは、知識人とはだれか、知識人はどのような影響力を持つか、またいかなる思考様式を持つかといった論点について批判的に検討するが、それにとどまらず、社会主義とそれと結びつく知識人に対抗する自由主義の実践的方向性を表明する。

ハイエクの知識人論は、社会主義との関係を中心に知識人を論じるものであるが、「思想の力に対する信念」という表現に端的に表されているように、思想の持つ力とその担い手である知識人の影響力の強調にその特徴を認めることができる。ハイエクに従えば、社会主義は労働者の運動から生まれたわけではなく、「長い間知識人だけが精通していたある種の傾向を持った抽象観念をもと

に、理論家が作り出したものにすぎず」、[現代の観察者には対立する利害の争いと見えるものは、実は、ずっと以前に少数の集団のなかでの思想闘争において決せられたもの]⁶⁾として、理論家の手による思想の主導性が主張される。そして知識人の果たす役割と影響力は次のように述べられる。

知識人の影響力を過小評価することは、致命的な間違いを犯すことになる。たとえ彼らの知識が皮相的なものにすぎず、またその知性が限られたものであったとしても、そう遠くない将来の社会の動向を決定づける世論を主として形作るのは、彼らの判断であることは変わりない。彼らのなかの活動的な一派がいったんある考えに染まってしまえば、それが一般に伝播するのは抗しがたい自然の成り行きであるといっても過言でない。知識人というのは、現代社会が知識や思想の普及のために発展させた器官であり、新たな考えは彼らの信条や意見のふりにかけられて、初めて大衆に伝えられるのである⁷⁾。

そして、このような「現代社会が知識や思想の普及のために発展させた器官である」知識人とはだれのことかが問題となる。彼の想定する知識人は、決して権力に対して真実を語るといったタイプのもではなく、また独創的な思想家や特定の分野の専門家とも異なるものである。それは、「広い範囲の話題についていつでも話したり書いたりできること、そして、自分が話しかける対象よりもより早く、新しい考え方に触れることができる地位や習性を有している」、[思想を広める仲

6) Hayek (1949) p.371, 邦訳6頁

7) *Ibid.*, p.374 邦訳10-11頁

介人」あるいは「思想の受け売りを専門とする人々 (secondhand dealers in ideas)」と言いうる存在とされる。現代社会においては、「ジャーナリスト、教師、牧師、講演者、出版社、ラジオ解説者、小説家、風刺漫画家、芸術家」などに加えて「科学者や医者などのような専門職、技術職」といった地位にある人々が、知識人の範疇に入ることになる⁸⁾。

このように現代の知識人を規定するとともに、知識人が社会主義と結びつく現状が確認され、批判的に分析される。つまり「知識人のなかでもとりわけ活動的で、知的で、そして独創的な人ほど社会主義に傾倒し」、「優秀な人が社会主義者になると、ほとんどの場合、現代社会の世論に決定的な影響を持つ知識人になることに専心する」⁹⁾といったように知識人と社会主義の結びつきが強調される。ここでは、社会主義者が主張する「物質的平等の理念」は、「自生的に育ってきた道徳的信条」でなく「知識人が理論的に構築したもの」にすぎず、あるいは社会主義は、「工学的技術を適用することによって人間の活動を一つの体系的な計画に沿って組織化することは社会に関して成功するはずだという」という先入見に基づくものであるとするハイエク独自の社会主義批判が見られるが¹⁰⁾、それにとどまらず批判は、「古典的自由主義」にも及ぶ。「知識人から見れば、古典的自由主義者は思索的ではなく、大胆さにも欠けている。そのための社会構造の変革や改善に関する古典的自由主義者の提案は、知識人に奔放な想像力が生み出すものに比べれば、貧弱なものにしか見えない」¹¹⁾とされ、さらには「既成概念を批判す

ることができ、新たな視点を追求し、新しい概念を試してみることができない余地がないような「大義は知識人の支持を得ることはできず、われわれの社会と同様に知識人の活動に依存している社会においては維持しえない」¹²⁾という厳しい批判が向けられる。

このように古典的自由主義が現代の知識人を引きつける要素を欠いている点を批判するにとどまらず、ハイエクは、「想像力をかきたてるような、新たな自由主義の綱領」の必要性とともに、「自由主義のユートピア」の主張にまで至る。

自由社会の建設を、再度、知的な冒険かつ勇気ある行為にしなければならない。われわれが、今、必要としているのは自由主義のユートピア、つまり現状を擁護するだけでなく、また社会主義を少し薄めた程度のものでなく、そして(労働組合を含めて)強者による力の行使を容認しない真に急進的な自由主義である。それは、あまりに実務的過ぎるものでもなく、また、今日、政治的に実現可能なことだけに視野を限定されない自由主義である¹³⁾。

このユートピアの実現に向けてコミットする、「権力の誘惑に惑わされず、速やかな実現がかなり難しい理想のために進んで行動できる知的指導者」の必要性が説かれる。それに加えて、ユートピア実現のために哲学的基盤に立った「思想の力」が強調される。

自由社会の哲学的基盤の構築を、再度、興味あ

8) *Ibid.*, p.372 邦訳 7-8頁

9) *Ibid.*, pp.379-80 邦訳18-19頁

10) *Ibid.*, pp.377-78 邦訳16-17頁

11) *Ibid.*, p.382 邦訳23頁

12) *Ibid.*, p.383 邦訳25頁

13) *Ibid.*, p.384 邦訳26頁

ふれる知的問題として、その実現をもっとも活動的な知性の創意と想像力をかきたてる課題にすることができなければ、自由の将来は本当に暗いものになってしまうだろう。しかし、最盛期にある自由主義の特徴である思想の力への信頼をとりもどすことができるならば、われわれは戦いに負けはしない¹⁴⁾。

このような「哲学的基盤の構築」に基づく「思想の力への信頼」の回復という主張は、後に展開していく思想運動としての新自由主義を理解するうえでも重要である。ハイエクは、経済問題研究所(IEA)を設立することになるアンソニー・フィッシャーに、「政治のことはもう忘れなさい。政治家はただ大多数の意見に従うだけだ。もし物事を変えたいならば、まずは考え方を変えなければならない¹⁵⁾」と語ったという逸話がよく引き合いに出されるが、ここで主張される知識人論と照らし合わせて理解される必要がある。「思想の力への信頼」の回復を目指して、ハイエクは知識人の組織化と世論形成を目指してモンペルラン協会の設立に着手することになる。

(2) モンペルラン協会の設立とその位置づけ

ハイエクが知識人論で述べるように、自由主義の側は、社会に浸透しつつある社会主義的傾向に対抗する知識人や専門家を圧倒的に欠くものであり、このような状況において、社会主義に対抗する科学や専門知識が再建されるための努力が行われねばならないという認識のもとに、ハイエクの言う知識人、つまり学者だけではなく、ビジネスマン、編集者、ジャーナリスト、政治家といった

実務家の結集を目的として、1947年にモンペルラン協会は結成されることになる。

モンペルラン協会は、包括的な学術に関わる綱領や政治綱領を持たないが、趣意書¹⁶⁾が作成され、その中で、協会の研究領域として次のような6項目を掲げる。

1. 現在の危機の道徳的および経済的起源を訴えるための、その性質の分析と説明
2. 全体主義的秩序と自由主義秩序の明確な区別のための、国家の機能の再定義
3. 法の支配の再構築の方法と、個人や集団が他者の自由を侵害する立場に立つことがなく、私有の権利が略奪の権利になることが許されないような、法の支配の発展を保証する方法
4. 自発性と市場の機能を損なわない方法での最小限の基準の確立の可能性
5. 自由に敵対する信条を普及させるための歴史の誤用との戦いの方法
6. 平和と自由の保護につながり、調和的な国際的な経済関係の設立を可能にする国際秩序

上記の研究項目に加えて、協会は、プロバガンダを行ったり、正当な教義を確立したり、特定の政党と連携するものでもなく、「唯一の目的は、共通の理想と広い概念に触発された人々の間で意見交換を促進することで、自由社会の維持と改善に貢献することである」とする。

この趣意書にもとづくモンペルラン協会の性格と位置づけについては、権上の分析¹⁷⁾が新自由主義の展開を考えるうえでも示唆に富む。それは、この趣意書に至る趣意書案とモンペルラン協

14) *Ibid.*, p.384 邦訳26-27頁

15) フィッシャー (2018)

16) 趣意書は、モンペルラン協会のHPで閲覧可能である

17) 権上康男 (2006)

会設立の一つの契機となる戦前のリップマン・シンポジウムのアジェンダとの詳細な比較検討を通して新自由主義が持つ特質を明らかにするものである。アジェンダと趣意書案を比較すると、「価格メカニズム」と「競争的市場」といった表現上の違い、「最大効用」の位置づけ、国家の介入の是非に関して齟齬があり、その背後に自由主義のとらえ方やその実現のための政策に関して異なる理念を持つ三つのグループの存在が明らかにされる。第一のものは、最大限効用の追求は善であるが最優先課題ではないとして、「社会的諸目標」「共同社会」「人類の理想」を掲げるフランス語圏の自由主義者、第二のものは、最大効用の追求、そのために市場機能ならびに市場そのものの拡大をはかり、国家の介入を独占の排除と予防に限定し、社会問題への配慮は狭い、19世紀の自由放任型の自由主義と重なるハイエクとフリードマンを中心とする英米の経済学者、そして第三のものは、一国の経済を複合経済として捉え、農民、企業や家計は、現実の経済組織と切り離せず、国家の介入や集団交渉による価格メカニズムの修正が行われるべきと主張するドイツの自由主義者とされる。それゆえ、新自由主義は、社会問題や市場への介入に対する姿勢が異なるこのようなグループによって構成され、ある特定の経済学説に還元したりすることはできず、「国家の機能の再定義」をはかり、ある一定の範囲において柔軟な対応を可能にするような性格を兼ね備えた「すぐれて現実対応型の自由主義」であるとされる。

それとともに、モンペルラン協会に対しては、「会員の活動を介して戦後の西側諸国の経済政策に多大な影響をあたえながらも、協会は外部から存在すらしれず」、「ハイエクの望む綱領的文書をもたない自由な組織のままにとどまり、社会的実

践はあくまでも会員の個人的な活動に委ねられることになり協会は一貫して文字通りの『国際政治アカデミー』にとどまった」という評価が下される。これに対して、P.ミロウスキーに代表される「思考集団」アプローチは、新自由主義の分析の起点としてのモンペルラン協会を重視する点で、この分析と共通するが、モンペルラン協会の位置付けにおいて大きく異なる。このアプローチは、モンペルラン協会を中核とするネットワークである「新自由主義思考集団」を、「現代の政治知識の最も強力な体系の一つ」、「20世紀後半の政治・経済思想の最も重要な運動」¹⁸⁾とし、新自由主義の世界的な展開は、このネットワークと不可分のものであると捉え、分析の中心に置くことになる。以下このアプローチの中心に据えられる「思考集団」の概念を中心に、このアプローチの描く新自由主義像を明らかにすることにする。

第二章 「思考集団」アプローチを巡って

(1) 「思考集団」について

P.ミロウスキーによれば、新自由主義をめぐる議論の混乱は、主に新自由主義に対する批判者の側の、新自由主義の定義の混乱にあるとされる。新自由主義が何であるかが深く討究されることなく、批判者は、新自由主義を「レッセ・フェール経済学」、「市場原理主義」、「自由至上主義(リバータリアニズム)」、「グローバリゼーション」、「生政治」、「金融化」などと同一視して批判することで満足している。このような経済理論や政治理論に還元する批判者の理解は、新自由主義の一面を捉えるにすぎず、それらの批判に欠落しているのは新自由主義を「20世紀後半の最も重要な政治・経済思想の最も重要な運動の一つ」としてと

18) Plehwe (2009) p.3

らえる視点である。つまり新自由主義は、一人の指導的な理論家の営為に還元されるのではなく、「複雑に構造化された長期の哲学的・政治的プロジェクト」¹⁹⁾として捉えられることが必要となる。彼は次のように述べる。

現在、知性史は、多くのそれぞれの学説において異なった個人的な見解を持つかもしれない献身的な指導層の意識的な討議の産物として捉えられることはほとんどない。(中略) そもそも存在したとしての話だが、孤独な天才が、隔絶された天井裏に一人で腰を下ろして、自身の頭脳で精巧な思考の構造を練り上げるという時代はすでに過去のものとなった。(中略) 近代世界の思考過程とその表現は、効果的に割り当てられ、高度に組織化されている。真の独創性は本当にまれであり、とりわけ政治思想は非常に反復された要素を示す。このことが、私が、科学史に由来するカテゴリーである、「思考集団 (thought collective)」に固執する理由である²⁰⁾。

このように新自由主義は、世代を超え、実行可能性について考慮しつつ、学説を批判し、再構成し、微調整し、精緻化する「意図的な共同の活動の産物」²¹⁾として捉えられることになる。ここで参照されている「思考集団」は、ポーランド人の医学者であるルードヴィッヒ・フレック (1898-1961) によるものであり、科学的認識の社会性が考察される中で提示された概念である。彼によれば、客観的な世界の認識を目指す研究者といえど

も、「偏見と伝統を持たず、知的な社会の諸力の影響を受けず、その社会の進化の影響と無縁の孤立した研究者は、何も目にする事なく、何も感じることはない」とした上で、人々の認識は、社会的な関係を離れて成立しない集団的な性格を持つものとして捉えられる。さらには、世界像や思想は、集団的活動である思考によって生み出されるものであり、それらを明確に認識するためには、同じ社会的活動に従事している集団の成員であることが必要とされる²²⁾。以上のような理解に立ち、人間の認識のあり方は次のように規定される。

それ (全ての認識) が社会的なのは、あらゆる絶えまない思考の交換が行われている間に、いかなる一人の創始者と結びつかない思想と基準が現れるからである。全ての参加者を拘束し、確実に全ての認識行為を規定する思考の共同的な様式が発展する。それ故、認識は以下の三つの要素の機能として考えられねばならない。つまり、個々の主体、一定の対象、主体がその内部において行動する一定の思考集団 (Denkkollektiv) の関係が考慮されねばならない。認識が機能するのは、一定の集団に起源を持つ思考様式 (Denkstil) が使用される時においてのみである²³⁾。

人間の認識がこのように把握され、「思考集団」とその集団が生み出す「思考様式」を離れて存在しえないことが定式化される。そして、「思考集団」に対しては、「相互に考えを交換し、知的な

19) Mirowski (2009) p.426

20) Mirowski (2014)

21) Mirowski (2014)

22) Fleck (1935) p.77

23) Fleck (1960) p.154

交流を絶え間なく行う人々からなる共同体²⁴⁾ という定義が与えられることになる。

この「思考集団」においては、個々の成員を結び付けるのは、客観的な知識や認識の共有といった次元を超えて、集団の連帯感情に基づく次元が強調される点を留意する必要がある。フレックによれば、「全く感情を伴わない思想は、意味をなさない」ものであり「感情を伴わない状態それ自体や純粋な合理性それ自体は存在しない」ものである²⁵⁾。この感情の次元である「集団的ムード」は次のように述べられる。

集団を維持し、成員を結びつける力は、集団的ムードに基づく共同体に由来する。このムードによって、同じ方向に向けられた認識、評価、認識されたものの使用に対する準備、つまり共通の思考様式が生じる²⁶⁾。

つまり、「思考集団」は、「集団的ムード」によって、集団に属する人々の共通のものの方である「思考様式」を生み出し、その「思考様式」により、人々の認識は方向づけられ、規定されることになる。

このような「思考集団」と「思考様式」に関して、野家は、トーマス・クーンの「科学者共同体」と「パラダイム」が対応するものとしている²⁷⁾。しかし、両者の間には大きな相違も存在するものと考えられる。クーンが述べる「科学者共同体」は、厳格な基準による評価によって審査されたメンバーから構成される自律的な専門家集団の

ことであるが、フレックの「思考集団」は、科学者集団に限定されない広がりを持ち、独自の組織構造を持つものである。フレックによれば、より進んだ社会においては様々な「思考集団」が存在し、それは宗教、芸術、科学、占星術、ファッション、政治、経済などにかかわるものとされる。これらの例からもわかるように、社会的な結社全般を包括するようなものとして「思考集団」は考えられている。そして「思考集団」の存在が長期に及び安定的になると、「思考集団」は高度な専門知識に通じた成員からなる少数者サークル (esoteric circle) とそのような専門的知識を持たない一般サークル (exoteric circle) という、エリートと大衆の関係と言いうような組織構造を持つことになる。こうした状況で人は同時に複数の「思考集団」に所属し、ある集団においては一般サークルに属し、別のサークルにおいては少数者サークルに属するようなことが想定される²⁸⁾。

このような組織構造と構成員をもつ「思考集団」の内部のコミュニケーションと「思考集団」間のコミュニケーションが、「思考様式」や科学的な事実の定着についてどのような影響を与えるかがフレックの分析の主題となる。「思考集団」内部のコミュニケーションは、「思考様式」が少数者サークルで形成されると、強制力を伴いながら一般サークルを通して伝達されることで「思考様式」とそれが生み出す思想が普及することになる。そしてこれらが少数者サークルにフィードバックされ、粘り強い、自己完結した、確実な非人格的な思考体系が作り出される。この過程にお

24) Fleck (1979) p.39

25) Fleck (1979) p.49

26) Fleck (1936) p.101

27) 野家 (2008) 184-185頁 クーンは、フレックの『科学的事実の発生と発展』に序文を寄せて、みずから影響関係を認めている。野家は、このことは、「クーンの独創性を貶めるものではない。むしろフレックの著作は「クーン以後」の科学論という概念パラダイムのもとで読み直されることによって、現代に甦ったのである」とする。

28) Fleck (1935) p.105

いて、とりわけ科学の「思考集団」の場合、少数者サークルと一般サークルの関係は、一方的な関係ではなく、前者による後者の「世論」や「常識」に対する配慮と後者の前者に対する信頼にもとづく相互依存に基づくものであり、両者の間には民主的なコミュニケーションが成立する。それゆえ、秘密主義や教条主義が支配する宗教の「思考集団」とは異なり、思考の発展と進歩に道を開くことになる²⁹⁾。そして現在の科学に見られるように、大きな集団が長く存在すると思考様式は固定化し、創造的なムードは見られなくなり、実務的な業績が支配的になり、意見の相違の余地が存在しなくなるまでに至る³⁰⁾。次いで「思考集団」間のコミュニケーションであるが、異なった「思考様式」を持つ「思考集団」の交流により、固定された意見のシステムは衰退し、「思考様式」の変化は、「新しい発見の可能性を開き、新たな事実を生み出す」ことになり、「集団間の思考のコミュニケーションの最も重要な認識論上の意義を持つ」。そして「コミュニケーションは常に変化を引き起こし、様式を再編する。その再編により、集団間の補強が達成されるとともに、集団間の根本的な変化が生じる」³¹⁾。

フレックの分析は、このように、認識の社会性を強調し、科学事実の成立において「思考集団」が果たす役割を、「思考集団」のコミュニケーションに焦点を当てることで明らかにしようとするものであった。新自由主義研究の「思考集団」アプローチは、この「思考集団」の概念によりながら、「新自由主義思考集団」の概念を彫琢し、新

自由主義の歴史と現状分析を行おうとするものである。

(2) 「新自由主義思考集団」

新自由主義研究における「思考集団」的アプローチの特徴は、P.ミロウスキーの次の主張に明確に読み取ることができる。

新自由主義は、たんなる経済的な教義ではなく、(中略)より深いレベルでは哲学的信条であるという考えを進んで認めようとするものはほとんどいない。新自由主義思考集団の統一性は、主としてその認識論的信念と組織構造に由来するものであり、その明白な多様性は、その中で調整されうる経済学と政治学の学説の多様性によってもたらされる。まず第一に、新自由主義は、資本家階級に対する粗雑な弁明の付随現象ではなく、それ以上のものであることがわかる³²⁾。

ここから明らかなように、このアプローチの独自性は、新自由主義の分析に際して、新自由主義思考集団が共有する「哲学的信条」、「認識論的信念」とそれを支える組織構造に焦点を当てる点に求められるであろう。ここでは、「思考集団」の統一性を担保するものとしての「哲学的信念」、「認識論的信念」が強調されているが³³⁾、他の個所では、「何よりもまず、新自由主義者を結び付けるのは、最終的に経済学、政治、科学にど

29) Fleck (1979) pp.105-106

30) *Ibid.*, p.103

31) *Ibid.*, pp.110-111

32) Mirowski (2019)

33) P.ミロウスキーは、新自由主義が哲学的な次元に関わることを新自由主義者自身が認識している例として、以下のJ.P.キャナンの1984年のモンベルラン協会での発言を引用する。「職業的に見れば経済学者が創設時よりモンベルランの会員の多数を占めていたが、設立趣意書で最初に表現されているように、協会の全体の方向性は、自由な社会の存在のために欠くことのできない哲学思想を彫琢することに向けられた。つまり政治哲学こそが、この協会の本質であり、またそうあるべきものである」Mirowski (2019)

れほど基礎を置くものであっても、認識上の関与 (epistemic commitments) である」³⁴⁾とも述べられる。このような性格を持った新自由主義は、フリードマンやハイエクの著作あるいはマネタリズムや最小国家といった学説に決して還元できる性格のものではないとされる。加えて、「資本家階級に対する粗雑な付随現象ではない」ということからわかるように、「新自由主義思考集団」を経済利害 (階級利害) から自立しているものとして捉える点、つまり思想の自立性の強調し、物質的条件を重視する左派に対して、思想やイデオロギー (世界観) に対して十分な考察を欠くと批判する点もまた、このアプローチの特徴である³⁵⁾。以上のように新自由主義を一つの哲学として、「認識論的な」次元にかかわるものとして把握することが、このアプローチの特質のひとつである。

そしてこのアプローチを特徴づけるもう一つのは、「思考集団」の組織構造、とりわけそのネットワークの分析に重点が置かれるという点である。新自由主義の研究は、「ますますグローバル化する歴史的な思考集団」³⁶⁾であるモンペルラン協会を起点として行われるべきであるとしたうえで、次のように述べられる。

新自由主義の起源と発展は、モンペルラン協会の創立者によって作り出された国際的な言説共同体を注意深く考察することなしには、説明できない。従来の思想史とは異なるやり方で、またハイエクの方針に基づき、われわれが提示し

ようとした説明は、広く分散した知識の力を新自由主義国際アカデミーの内部に統合することで思想の力が強化されることを理解しようとするものであった。(中略) 彼らは努力して、新自由主義思想を収集し、創造し、討論し、伝播し、動員することを意図した精巧な社会的な機構を作りだし、展開することに成功した。その結果、彼らは、現代的な知的労働の分業の再編成の理解を前進させ、新たな説得のテクノロジーと言えらるものにおいて、学者やその他の知的職業に適切な役割を与えることになった³⁷⁾。

このようなモンペルラン協会の位置付けで目をひくのは、「国際的な言説共同体」、「精巧な社会的機構」や「説得のテクノロジー」といったように、知識の生産と流通の観点から評価が下されている点である。そして「知識の生産と普及の絶え間ない過程」が、新自由主義の中心を構成し、長期にわたり影響力を行使することに成功したことの鍵であるとされる。このようにして生産され、流通される知識は、包括的なものであり、「異なった分野の研究者を導く規範と原理的な信念を作り出す」という点で「個別分野を超えた」性格を持ち、主に社会科学に限定されるが「学際的な」な性格を持ち、大学の研究者だけでなく、ジャーナリスト、企業のリーダー、政治家、シンクタンク研究員が参与するといった「アカデミズムの枠を超えた」性格を持つとされる³⁸⁾。それゆえ、このアプローチに基づく研究にとっては、「哲学、経済学、法学、政治学、歴史、社会学その他の学問分野に

34) Mirowski (2009) p.417

35) この点に新自由主義と資本家の関係は次のようにも述べられている。「新自由主義と資本家の関係は、受動的な擁護)者や企業の宣伝係の関係ではない。新自由主義の目的は、政治生活の流れと意味を変えるために、全員に対して完全な再教育を進めることである。」(Mirowski 2009 p.431)

36) Plehwe (2009) p.4

37) Mirowski (2009) p.432

38) Plehwe (2009) pp.5-6

おける、新自由主義思想の政治的な力および経済的な力」を理解することが一つの主題となる³⁹⁾。

さらにこのアプローチの特徴は、「新自由主義思考集団の設計者は、ヘゲモニーをめぐる争いのために、学問、メディア、政治、ビジネスなど、重要な領域と組織を注意深く結びつけ、組み合わせてきた。専門の観点におけるネットワークの能力と新たなタイプの知識装置（新自由主義系シンクタンク）の組織能力は、新自由主義のヘゲモニーの上昇と政策研究の変容を説明するためによりよく理解される必要がある⁴⁰⁾」ということからもわかるように、「新自由主義思考集団」のネットワークと新自由主義系シンクタンク⁴¹⁾の分析に焦点があてられるという点にある。

このようなネットワークを研究の対象に設定することに關しては、「組織された新自由主義者を、陰謀論と同類であると信じる人々とはちがって、新自由主義は他の社会集団と全く同様に研究可能であり、さらには国際的観点からよりよく研究できるであろう。それは、彼らが、とりわけモンペルラン協会といった団体、あるいはアトラス経済研究所ネットワークといったシンクタンクのネットワークのような超国家的なネットワークを構築する傾向にあるからである⁴²⁾」として、具体的なネットワークの分析が、研究の実証性を担保するものとされる。そして、グラムシによりながら、「超国家的な新自由主義言説共同体の力の源泉は、政治、科学、学問におけるはっきりと公開され、公認されている専門能力によるものではない。新

自由主義のヘゲモニーが生産され、再生産されるのは、様々な制度的領域（教育機関、ビジネス、政治、メディア）を超えて広がる拡張的なネットワークを通してである⁴³⁾。そして「これらの新自由主義のネットワークの力は、「政治社会」の領域だけでなく、「市民社会」のより広い領域においても、領域横断的なやり方で新自由主義の中心的な原理を明確にする能力による⁴⁴⁾」とされる。

そしてこのネットワークを通して確立されえる新自由主義のヘゲモニーとは、「新自由主義の明確な最終状態の達成」の中にあるのではなく、むしろ「適切で、よい政府を構成するものは何かのためのアジェンダを設定し、新自由主義的なコースからの逸脱を、間違った考え、見当違い、あるいは危険なものとして批判することで、新自由主義の線に沿って政治・経済的發展に対して永続的に影響を及ぼすことのできる能力として」把握される⁴⁵⁾。

このように新自由主義は、モンペルラン協会の趣意書に明文化された原則を保持しつつも、それぞれの状況に応じて柔軟に対応して、影響力を行使することでヘゲモニーを確立することを目指すものとして把握される。重要な問題に關して対立が生じた場合、その対立を解消しようと試みられるが、全体的な原則と矛盾をきたさない限りにおいて、対立は受け入れられることになる⁴⁶⁾。このネットワークにおける組織内部の知的な傾向の多様性と市場化と民営化を絶対視するのではない政策における柔軟性を理解することで、新自由主義

39) *Ibid.*, p.7

40) *Ibid.*, p.22

41) 新自由主義シンクタンクについては、『グローバル・ダイアログ』（第8巻第2号）の特集「新自由主義系シンクタンク」を参照せよ。

42) Plehwe (2021)

43) Plehwe (2005) p.39

44) Plehwe (2005) p.29

45) *ibid.*, p.45

46) Plehwe (2009) p.39

が持続してきたことが説明可能とされる⁴⁷⁾。そしてこのような「思考集団」としての新自由主義という把握において明らかになるのは、学説、政治プログラム、合理性としての一貫性ではなく、運動としての一貫性であり⁴⁸⁾、新自由主義は、「20世紀後半の政治・経済思想の最も重要な運動」⁴⁹⁾と評されることになる。

さらに、このアプローチで特質すべきは、このようなモンペラン協会を中心にしたネットワークによって新自由主義を定義づけようとする点である。P.ミロウスキーは、新自由主義の定義を検討し、歴史的な時代区分に基づく定義、ワシントンコンセンサスのような政策パッケージとする定義、フーコーの新自由主義の分析に依拠した定義と並ぶものとして、みずからの定義を次のように述べる。

最後である四番目の新自由主義の定義は、1947年以降のモンペラン協会に関連する一連の思想家や活動家の最も具体的な姿からなる。米国では、シンクタンク（ケイトー研究所、マンハッタン研究所、ヘリテージ財団、競争企業研究所）、学術ユニット（フーバー研究所、マーカタス）、非公然のネットワーク（国家政策評議会、アメリカン・フォープロスぺリティ、米国立法取引所評議会（ALEC）、フェデラリスト協会、資金源（コーク家、ブラッドレー家、フォルカーファンド、リバティファンド、ロックブリッジ）の集合体が形成された。他の国でも同様の構造がみられる⁵⁰⁾。

このようなネットワークのあり方を特定して、それを構成する諸機関の影響力の行使によって、いかに新自由主義のヘゲモニーが形成されるかがこのアプローチの分析の主眼となり、他のアプローチに比べて、最も簡潔であり、最も実証的な内容を持つものとされる。

第三章 P.ミロウスキーの「新自由主義」論を巡って

（1）P.ミロウスキーの「新自由主義」論

「思考集団」アプローチの特徴的な点を明らかにしてきたが、次いで、このアプローチに立ち、独自の「新自由主義」論を展開するP.ミロウスキーの議論について検討する⁵¹⁾。ここでは、科学論やメディア論の領域をも射程に入れた広範囲に及ぶ、彼の「新自由主義」論の中でも、新自由主義研究において争点となる「新自由主義」と「古典的自由主義」の関係、彼の独自の議論である「二重真理論（double-truth theory）」に焦点を当てること、彼の「新自由主義」論の中心的な論点を明らかにする。

彼の「新自由主義」論の特徴は、「新自由主義」と「古典的自由主義」の間の断絶を強調して、その人間観・社会観において全く異なった認識論的な観点に立つとする点にある。そこでは、「古典的自由主義」を特徴づけるものは、自生的な市場の概念、良い統治と自由の原則を指示する自然権や伝統、自立的な主体として行動するための教育

47) Slobodian and Plehwe (2020)p.6

48) Dean (2014)

49) Plehew (2009) p.3

50) Mirowski (2022)

51) Mirowski (2013) は、彼本来の研究領域である経済学史研究や科学哲学研究を土台にしつつも、その論述のスタイルは、先行研究を参照し、テキストクリテックを重ねる学説史研究とは一線を画し、社会運動に対する考察をも含む現代社会論といった性格を持った著作である。

の必要性、市場の破壊的な作用から社会を守る危害原則などに求められる⁵²⁾。そして、「新自由主義」はこれらを否定するものとして捉えられることになる。つまり「カタラクシー」の容赦ない論理に抵抗する社会の側面は破壊され、自由は、自然権や伝統という基盤から切り離され、市場への参加と同じものとされ、選択の自由のように消極的にのみ規定される。さらには自立した人格を陶冶するために必要とされた教育は、社会での機能を持つものとは考えられなくなり消費財と見なされる。そして何にもまして「古典的自由主義」と「新自由主義」の間には、認識的な枠組みの決定的な断絶が存在するものとして把握される。それは、後者が、「『市場』は、いかなる人間よりも、またいかなる人間のもつ可能性よりも、強力で効果的な情報処理装置である」というハイエクの市場認識に立脚するという点に求められることになる。この認識は、「現実の市場や理想の市場についての全く新しい理論」であり、社会理論家によって市場が、「真理探究のエンジン」として定義されたことはかつてなかったことであり、「新自由主義」は、18世紀の政治哲学の後継者であると自称しても、「啓蒙のプロジェクト」の全面的な否定の上に成り立つものとして捉えられる。つまり「新自由主義」においては、市場が生み出す破壊的な帰結は、知的な計画と介入によって調整される、あるいは人間の意志と真実の探求が、人々の合理的な自己決定というカントの想定を支え、多くの近代的な社会主義が共有していた「啓蒙主義の信念」は一切否定されることになる⁵³⁾。

このように、「新自由主義」は、ハイエクの市場観に依拠し、「古典的自由主義」と区別されるものとして捉えられるとともに、新自由主義思考集団の中の様々な思想傾向を持ち、具体的な政策において対立する諸グループもこのような認識論的な枠組みを共有するものとされる。

以上のような「新自由主義」の認識論次元の考察に加えて、彼の「新自由主義」論で注目すべき議論は、「思考集団」の構造とも関連する「二重真理論」⁵⁴⁾である。この理論は、新自由主義思考集団に存在する矛盾を把握し、整合的に理解するためにP.ミロウスキーによって導入された理論と考えることができる。ここでの新自由主義の矛盾とは、「国家の活動領域の拡大の危険を警告しつつ、同時にみずからの好みの強力な国家が、『自然な』規制によって無害化されるのを想像し」、「自由市場を情報の自然な発生装置であり、伝導ベルトであると想定しつつ、同時に必死に冷酷に地上で『思想闘争』を行い」、「みずからのプログラムは、制限のない経済成長と人間の福祉の増大に至ることを主張しつつ、同時に人間の知性では本当にそのようなものは知りえず、それゆえその結果によってそのプログラムを正当化するのは妥当性を欠くと主張し」、「市場を自然なものとしつつ、同時に絶えず再構築するために、細心の注意が必要であるとし」、「みずからが描く市場を人間の制度のうちで至高のものとしつつ、同時に市場それ自身では、政治的、社会的、宗教的、文化的性格を持った経済を超えた価値を達成したり、育んだりするには不十分であると指摘する」⁵⁵⁾ 点に

52) Mirowski (2020)

53) Mirowski (2019)

54) P.ミロウスキーは、「二重真理論」は、ハイエクが、レオ・シュトラウスの『迫害と書く技術』で展開される、秘教と公教の区別（「大多数はあるメッセージを受け取るだろうが、特別に哲学の訓練を受けたエリートは、異なった秘教的なメッセージをくみ取ることができるであろう」）に影響を受け、みずからの新自由主義論の中に持ち込んだと断定する。(Mirowski 2014)

55) Mirowski (2013) p.69

求められる。このような矛盾は、例えば、選択の自由や規制緩和や民営化を主張する一方で、その実施に際しては、強力な政府の力の行使（＝ショック・ドクトリン）に訴えるというフリードマンに端的に見られるものである。

このような矛盾を理解するために、P.ミロウスキーが提示するのが「二重真理論」である。新自由主義の「二重真理論」とは、「エリートは、民主主義を抑圧するシュミットの必要性を理解するよう教育され、大衆は、『過保護国家の崩壊』と『選択の自由』の破廉恥な物語を聞かされる」と述べられることからわかるように、エリートと大衆という区別を導入することで、新自由主義は、「エリートの真理」と「大衆の真理」という二重の真理をもつものとして捉えられる。そして「エリートの真理」において、「多数派が実践する自由の行使だけが重要であるという前提で進めば、不自由の特徴をすべて備えた停滞した社会が生まれることは間違いないだろう」⁵⁶⁾というハイエクの発言に明らかのように、新自由主義の反民主主義的な本質が現れるものとされる。

このような真理の区別は、P.ミロウスキー自身は論じていないが、先に検討したフレックの「思考集団」の「一般サークル」と「少数サークル」の分析と対応するものと見なすことができる。フレックにおいては、「思考集団」の中核を形成する専門家である「少数者サークル」とその周辺部

にいる非専門家からなる「一般サークル」の間のコミュニケーションが問題にされ、科学者の「思考集団」は相互的なコミュニケーションが行われ、科学知識が定着し、発展することが分析され、このような「少数者サークル」からの一方的なコミュニケーションだけが行われる「思考集団」は、秘密主義と教条主義がはびこり、宗教的な「思考集団」がこのような性格を持つと分析された。この分析に照らすなら、P.ミロウスキーの描く「新自由主義思考集団」は、一定の枠内での多様性と路線の柔軟性は強調されるものの、コミュニケーションに関しては、外部から「大衆の真理」を大衆に対して一方的に注入するような存在であり、大衆はその真理を受け入れ、みずから新自由主義的な経済人（ホモエコノミクス）として、つまり「自分自身の企業家（entrepreneur of the self）」として「日々の新自由主義（everyday neoliberalism）」を生きることになる⁵⁷⁾。このような「新自由主義思考集団」は、科学者による「思考集団」としてよりも、宗教的「思考集団」の特性を帯びるものと評価される⁵⁸⁾。そして、「新自由主義」がこのような「二重真理論」に立脚していることを欠いた分析は、「新自由主義」の理論としては不十分なものであるとことが強調される⁵⁹⁾。

以上が、P.ミロウスキーの「新自由主義」論において中心的な論点となる、古典的自由主義と新

56) P.ミロウスキーは、ハイエクの民主主義に対する姿勢は、「強い国家だけが自由市場経済を維持・強化できる」、「強い国家だけが真の分権を生み出し、自由で自律的な領域をもたらしことができる」とするシュミットの影響を受けていると断定する。(Mirowski 2009)

57) 新自由主義的な主体についての分析は、Mirowski (2013) pp.89-155を参照。

58) Shammas (2017) は、イデオロギーの純粋性や知的な厳格さを維持するための警戒心から、協会は宗教的な性格を持ち、みずからの見解は正しいと宗教的な確信を持つ右派の信者の宗教団体のようものであるとする。

59) P.ミロウスキーは、フーコーの新自由主義論を、市場と政府だけでなく、人間存在の全体を新たな様態に作り直すという点を明かにした点、新自由主義を古典的な自由主義への回帰でないとした点を評価するが、新自由主義の持つ「二重真理」の構造を見抜くことができなかつたとして次のように批判する。「他の点では慧眼であったフーコーが誤った点を要約すれば、市場は、いかなる人間あるいは人間の組織よりも強力な情報処理装置であるという根本的な新自由主義の教義を鵜呑みにした点である」「新自由主義流の統治性は、市場を全てのの人にとっての真理の場に高めあげるが、この場合全てのの人というのは新自由主義者を除いてということである。」(Mirowski 2013 p.98) フーコーの新自由主義論については、佐藤 (2009) を参照。

自由主義の区別の問題と「二重真理論」の概要である。

(2) 批判的検討

以上見てきたように「思考集団」アプローチは、ハイエクやフリードマンといったように一人の人物に焦点を当てるだけでなく、ハイエクが述べる「知識人」が作り出す学術団体、シンクタンク、さらにはそれらの組織が織りなすネットワークに至るまでを研究対象とし、新自由主義の思想運動としての側面に光を当て、その歴史的展開を明らかにしようとするものであった。著名な思想家のテキストを超える対象として新自由主義を位置づけ分析を広げた点は、このアプローチの評価されるべき点であるが、このアプローチを巡る批判が明らかにするように、方法論に関する問題も存在すると考えられる。

第一のものとして、このアプローチにおいては、新自由主義を推進する主体の中心はほぼ「新自由主義思考集団」にのみおかれ、その他の集団に対する分析が等閑視される傾向にあるという批判である。例えば、オーストラリアの新自由主義化の過程を分析したD.カイルとE.ハンフリー⁶⁰⁾は、オーストラリアでの新自由主義思考集団は、市場を支える国家の必要な役割を認めずラディカルな政策提言を行うだけで、政策担当者にとって有用な専門知識を生み出すことができず、政治過程を特徴づける妥協に資することがなく、新自由主義的改革の立役者ではなく、強硬派にすぎなかったとする。このような改革を進めたのは、思考集団ではなく、中道左派政党と労働運動の役割が大きいとして、その役割の分析に焦点を当て

る。この事例にみられるように、思考集団が果たす役割は、各国の置かれた状況に応じて大きな違いがある点が留意される必要がある⁶¹⁾。

続く批判は、このアプローチの新自由主義の分析は、思想の分析にのみ焦点が当てられ、現代資本主義の分析を欠くという観点からのものである。P.ミロウスキーは、P.ミロウスキー（2013）の書評において、「いかに思想の体系が資本主義の時代を画するようになったかを理解するためには、知性史以上のものが必要である」として、次のように述べる。

この本では、新自由主義思考集団が、経済学の専門家の支配から国家の再編成、人間の新しい自己認識の形成に至るまで、あらゆることをなんとか成し遂げ、絶大な権力を有しているとされている。読者は、新自由主義思考集団がいかにしてそのような権力を獲得したのか不思議に思う。このことは、本書の最大の欠点である、現代資本主義の構造に関する理論が欠如していることにつながる。実際、新自由主義思考集団は、国家や民衆運動など、独自の利益や思惑を持つ他の機関や集団と対峙することなく、ある種の真空状態で活動しているように見える⁶²⁾。

この批判と同様の観点から、W.デービスは、P.ミロウスキーの議論の意義と問題点を次のように述べる。

P.ミロウスキーの歴史的な研究は、新自由主義者が識別可能な知識人のネットワークであり、公共政策の問題に対する自由市場の解決策を意図

60) Cahill and Humphrys (2019)

61) Masqualier (2020) は、フランスの新自由主義化の過程において、思考集団ではなく、社会党や労働組合が主導的な役割を果たしことを示すものである。

62) Hideman (2014)

的かつ協調的に推進したことを説得的に示している。しかし、新自由主義者はこれを単独で行うことができたのだろうか。(中略)1960年代から70年代にかけての規制の高まりに対抗するために、アメリカ企業が保守的なシンクタンクや評判の悪い科学的主張に巨額の資金を注ぎ込んできたかという別の側面が存在する⁶³⁾。

このように、P.ミロウスキーが、知識人と思考集団の自立性や主導性を過度に強調することで、新自由主義に対する企業(=資本)の影響力の分析が欠如していることが批判される。それとともに、現代資本主義との関連において思考集団の分析が位置づけられる必要性が強調される。これらの批判は、P.ミロウスキーに向けられたものであるが、「思考集団」アプローチ全体にも当てはまる指摘であると考えられる。

これらの批判が指摘するのは、新自由主義の分析に際しての、思想考集団の位置づけの問題といえることができるだろう。P.ミロウスキーのように思考集団を強固なネットワークとして、あたかも現実の利害関係や対立関係を超越した歴史の主体のように描くと、陰謀論という批判を招くだけでなく、そのような歴史は、このネットワークによる支配とその再編からなる非常にスタティックな歴史となり、その持続性のみが強調されることになるのではないかと危惧される。先のD.カイルとE.ハンフリーが主張する、「新自由主義思想、新自由主義以前の時代から継承している経済規制の制度的構築物、新自由主義国家の変容過程の資本蓄積のダイナミズムの間の具体的で、複合的な関係の詳細な解明と特定を目指す研究アジェンダの

必要性」⁶⁴⁾のように、全体の中でしかるべき位置に「思考集団」の研究を位置づけることで、新自由主義の分析は進められるべきである。

参考文献

- Cahill, D and Humphrys, E. (2019) "Rethinking the 'neoliberal thought collective' thesis" *Globalisations* 16 (4) 1-18.
- Cohen, R.S and Schnelle, T. (eds) (1986) *Cognition and Fact: Materials on Ludwik Fleck, Boston Studies in the Philosophy of Science* Vol. 87, Dordrecht: Reidel
- Davies, W. (2018) "Le néolibéralisme suit il encore un plan?", *Zisel* 1 No3 189-196.
- Dean, M. (2014) "Rethinking Neoliberalism", *Journal of Sociology* Vol50 (2) 150-163.
- Fleck, L. (1979) *Genesis and Development of a Scientific Fact*, Chicago:University of Chicago Press.
- Fleck, L. (1935) "Scientific Observation and Perception", in General, in R. S. Cohen and Th. Schnelle (eds.), *Cognition and Fact: Materials on Ludwik Fleck*, (pp.59-78).
- Fleck, L. (1936) "The problem of epistemology", in R. S. Cohen and Th. Schnelle (eds.), *Cognition and Fact: Materials on Ludwik Fleck*, (pp.79-112).
- Fleck, L. (1960) "Crisis in science", in R. S. Cohen and Th. Schnelle (eds.), *Cognition and Fact: Materials on Ludwik Fleck*, (pp.153-158).
- Gerstle, G. (2020) *The Rise and Fall of the Neoliberal Order America and the World in the Free Market Era*, Oxford: Oxford University Press.
- Hayek, F.A. (1949) "The Intellectuals and Socialism", in G.B.de Huszar (eds.), *The Intellectuals: A Controversial*

63) Davies (2017)

64) Cahill and Humphrys (2019)

- Portrait*, (pp.371-84) (「知識人と社会主義」尾近裕幸 訳『社会主義と戦争 (ハイエク全集第Ⅱ期第10巻)』春秋社, 2010年)
- Hideman, P. (2014) "Bulletproof Neoliberalism" *Jacobin* 2014/6/01 <https://jacobin.com/2014/06/bulletproof-neoliberalism/>.
- Huszar, G.B. (1960) *The Intellectuals: A Controversial Portrait*. Glencoe, Illinois: theFree Press.
- Masqualier, C. (2020) "Theorising French neoliberalism: The technocratic elite, decentralized collective bargaining and France's 'passive revolution'", *European Journal of Social Theory* Volume 24 Issue 1.
- Mirowski, P. (2009) Postface: Defining neoliberalism, in P.Mirowski and D.Plehwe (eds), *The Road form Mont Pèlerin: The Making of the Neoliberal Thought Collective*. (pp.417-455). Cambridge, MA: Havard University Press
- Mirowski, P. (2013) *Never Let a Serious Go to Waste: How Neoliberalism Survived the Financial Meltdown*, London: Verso.
- Mirowski,P. (2014) "The Political Movement that Dared not Speak its own Name: The Neoliberal Thought Collective Under Erasure", *Institute for New Economic Thinking Working Paper* No.23.
- Mirowski, P. (2019) "Hell is Truth Seen Too Late", *boundary2* 46, no1: 1-53.
- Mirowski, P. (2020) "Neoliberalism",in Vernengo, M., Caldentey, E., Rosser Jr, B. (eds) *The New Palgrave Dictionary of Economics*. Palgrave Macmillan, London. https://doi.org/10.1057/978-1-349-95121-5_3085-1
- Mirowski, P. (2022) "The Death of Neoliberalism has been greatly exaggerated". *Jacobin* April 27, 2022. <https://jacobin.com/2022/04/end-of-neoliberalism-think-tanks-lobby-groups>
- Mirowski, P, and Dieter Plehwe, eds (2009) *The Road form Mont Pèlerin: The Making of the Neoliberal Thought Collective*. Cambridge, MA: Havard University Press
- Mirowski, P, Plehwe, D and Slobodian, Q eds (2020) *Nine Lives of Neoliberalism*, London: Verso.
- Plehwe, Dieter. (2009) Introduction: Defining neoliberalism, in P. Mirowski and D.Plehwe, eds. *The Road form Mont Pèlerin: The Making of the Neoliberal Thought Collective*. (pp.1-42). Cambridge, MA: Havard University Press
- Plehwe, Dieter. (2021) "Why 'pensee unique' will be misleading" <http://www.transform-network.net/blog/article/why-pensee-unique-will-be-misleading/>
- Plehwe, D. and Walpen,B. (2005) "Between network and complex organization The making of neoliberal knowledge and hegemony", in Plehew, Dieter, Behnard Walpen, and Gisela Neuhnhooffer, eds. *Neoliberal Hegemony: A Global Critique*. (pp.27-50) New York: Routledge.
- Plehwe, Dieter, Behnard Walpen, and Gisela Neuhnhooffer, eds. (2006). *Neoliberal Hegemony: A Global Critique*. New York: Routledge.
- Shammas, V.L (2017) "Burying Mont Pèlerin: Milton Friedman and neoliberal vanguardism" *Constellation*. 2017; 1-16.
- Sitarman, Ganesh (2019) "After Neoliberalism" *Nation* December 24 2019 <https://www.thenation.com/article/archive/neoliberalism-policies-nationalism/>
- Slobodian, Quinn and Plehew, Dieter (2020) Introduction, in Mirowski, P, Plehwe, D and Slobodian, Q eds (2020) *Nine Lives of Neoliberalism*, London: Verso.
- Steimmetz-Jenkins, Daniel (2022) "Has Neoliberalism come to an end?" *Nation* April 13, 2022. <https://www.thenation.com/article/politics/neoliberalism-gary-gerstle/>

権上健男 (2006) 「新自由主義の誕生 (一九三八—一九四七年) - リップマン・シンポジウムからモンペルラン協会の設立まで」『新自由主義と戦後資本主義 欧米における歴史的経験』日本経済評論社

佐藤嘉幸 (2009) 『新自由主義と権力 - フーコーから現在性の哲学へ』人文書院

野家啓一 (2008) 『パラダイムとは何か - クーンの科学史革命』講談社

フィッシャー, カリン (2018) 「アトラス・ネットワーク」
田中里朋訳『グローバル・ダイアログ』第8巻第2号.

ホームページ

モンペルラン協会 <https://www.montpelerin.org>

『グローバル・ダイアログ』(第8巻第2号) <https://globaldialogue.isa-sociology.org/languages/japanes>